

家庭における主婦の調理用計量器使用の実態

——計量器の所持と使用に影響を与えている要因について——

安藤 昭代・赤木 啓子

A Survey of Housewives Who are Making Use of Cooking-Measures at Home

——on the Factors Affecting Possession of
and Actual Use of Cooking-Measures——

Akiyo Ando and Keiko Akagi

緒 言

昭和22年の学校教育法の制定¹⁾以来度重なる教育課程の改訂¹⁾にともなうて、現在では小学校において「家庭科」の男女共修、中学校に「技術・家庭科」、高等学校に「家庭一般」がそれぞれ女子必修として課せられている。これら家庭科の食物領域において実施される調理実習では、経験や勘に頼らず計量カップなどの調理用計量器を使用し合理的に調理作業を行なう教育がなされている。短大・大学の家政学科・学部における調理実習については言うまでもないことである。

このように学校の調理実習において学習した調理に計量器を使い習慣が、果して個々の生徒・学生にどれほど定着し、卒業後実際に家庭の主婦になった場合に生かされているであろうか。家庭の主婦に調理用計量器がどのように使用されているか、アンケート調査による実態については別誌²⁾に概要を報告した。

本報は主婦が調理用計量器を台所に所持しているか否か、また実際の調理にそれらを使用しているか否かの実態を調査し、さらにその実態に影響を与えている要因について調査ならびに検討を行なった。

方 法

1. 調査対象

名古屋市内に居住する家庭の主婦を被調査者とした。すなわち名古屋市内の私学A高校、公

立B高校の一年次生の母親にアンケートを実施した。高校一年生の母親を選択した理由は、この世代の大半は戦後の新学制により中学・高校の「家庭科」を履修していることが予想されるからである。アンケートの回収率は97.2%，そのうち名古屋市内居住者は82.5%である。実数は第1表に示すように、名古屋市以外の市町村に居住する者を除き、名古屋市内に居住する396名である。

第1表 アンケート調査実施数 (単位：枚)

校名	配布数	回収数			
		総数	名古屋市内	他の市町村	無効数
A校(私立)	249	244	177	57	10
B校(公立)	245	236	219	15	2
計	494	480	396	72	12

2. 調査時期

昭和59年1月10日から約10日間に、アンケート調査を実施した。

3. 調査方法

第2表に記した調査事項に関する質問を設定した調査用紙を作成しアンケートを行なった。

第2表 アンケートの調査事項

I. 被調査者の属性	
1. 年齢	
2. 職業	
3. 最終学歴	
4. 家族構成	
II. 被調査者の個人的要因	
1. 好む家事(掃除・洗濯・料理)の順位	
2. 家庭調理における食生活観	
3. 学校時代に計量器使用経験の有無	
III. 家庭における食生活形態	
1. 家庭で作る食事(朝・昼・夕)	
2. 1日の総調理時間	
3. 家族との食事のとり方	
4. 調理済み食品の使用	
5. 「食事材料宅配」の利用	
6. 家族との外食	
IV. 計量器の所持と使用	
1. 台所に所持しているか否か	
1) はかり	2) 計量カップ
3) 計量スプーン	4) 温度計
2. 調理時に使用するか否か	
1) はかり	2) 計量カップ
3) 計量スプーン	4) 温度計

調理用計量器は「はかり」「計量カップ (200ml)」「計量スプーン (5ml・15ml の2本または2.5mlを加えた3本組)」「温度計」の4種類である。

4. 集計ならびに統計処理

第2表に示した各調査事項の単純集計を行なったのち、4種類の計量器の所持と使用の実態に影響を与えている要因を検討するため、クロス集計を行なった。すなわち第2表に示した被調査者の属性に関する4項目、被調査者の個人的要因に関する3項目、家庭における食生活形態に関する6項目の合わせて13項目と、各計量器の所持と使用についての2項目とをそれぞれクロス集計し、 χ^2 検定³⁾により有意差を求め、それらにおける因果関係や相関関係について検討した。有意差検定は被調査者の無回答 (No Answer) の分は除外して行なった。統計処理については、流通情報センターK.K. (東京都) に依頼した。

結果ならびに考察

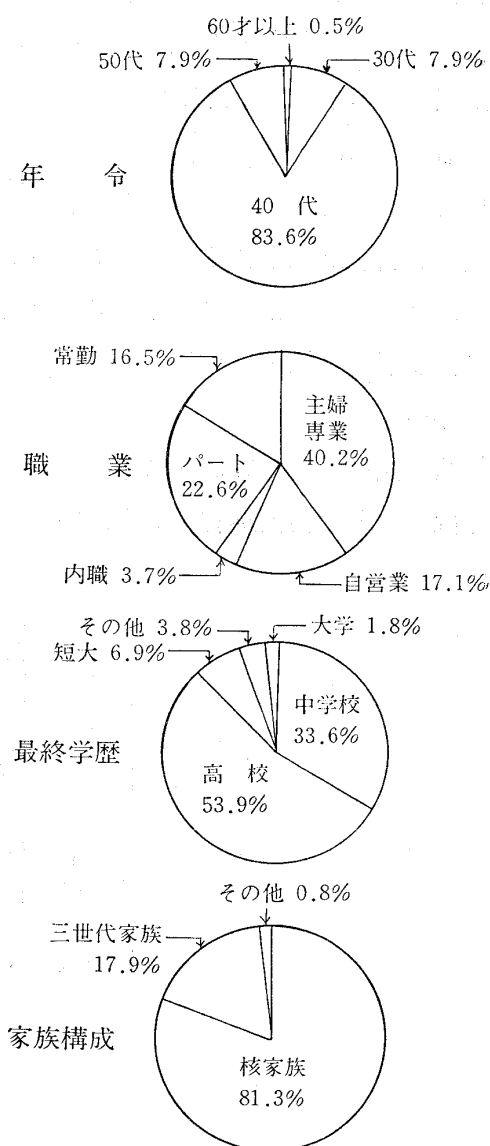
1. 被調査者の属性

被調査者の属性について単純集計した結果を第1図に示した。年齢は40代が圧倒的に多く83.6%、次いで30代と50代がそれぞれ7.9%である。職業は主婦専業が40.2%で最も多いが、パート・自営業・常勤・内職を合計すると59.9%となり、半数以上の主婦が何らかの形で働いている。最終学歴は高校が53.9%で全体の約半数を占め、次いで中学校>短大>その他(各種学校など)>大学の順である。家族構成は核家族が81.3%の大半を占め、三世代家族は17.9%、その他(母子家庭など)が0.8%である。

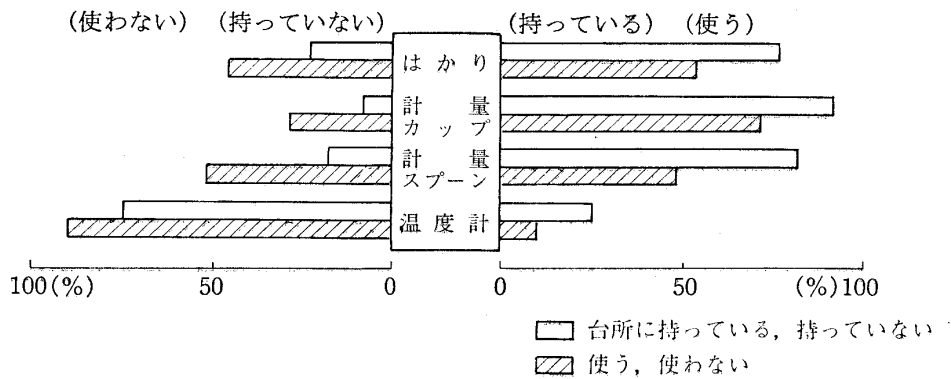
2. 計量器の所持率と使用率

4種類の計量器の所持率と使用率(396名中における割合)を単純集計した結果を第2図に示した。

所持率は「はかり」約77%、「計量カップ(以後カップとする)」92%、「計量スプーン(以後スプーンとする)」82%の高率に対し、「温度計」は25%で非常に少ない。



第1図 被調査者の属性 (N.A.を除いた%)



第2図 計量器の所持率と使用率

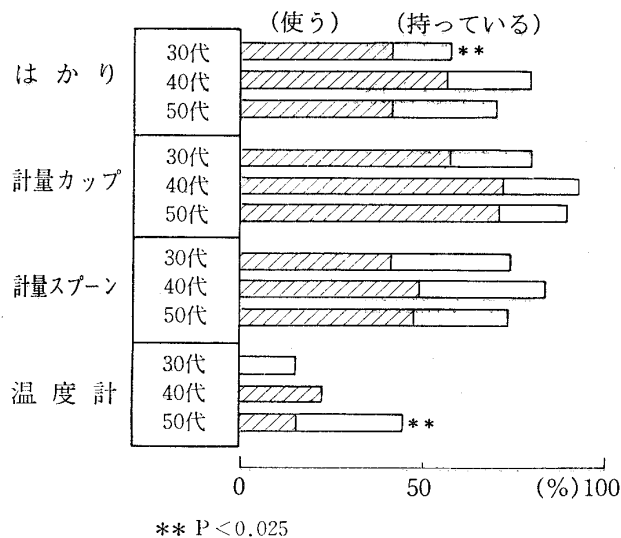
一方調理時における使用率は、「はかり」約54%、「カップ」71%、「スプーン」48%、「温度計」10%で、各計量器とも所持率に対して使用率はかなり低い。比較的良好に使用するのは「はかり」と「カップ」である。「はかり」はほとんどが自動秤であるから安易に使い、「カップ」は炊飯に際し米や水を計るのに欠かせぬからであろう。「スプーン」の使用率の低さは、使い慣れるためにはスプーン容量を知っていなければならないから、やや面倒なのであろう。「温度計」が所持率・使用率ともに他の計量器に比較して低いのは、揚げ物や寒天調理のように使用する料理に限られるからであろう。

3. 調理用計量器の所持と使用に影響を与える要因

1) 被調査者の属性との相関

① 年齢

第3図にみられるように「はかり・カップ・スプーン」の所持率は40代が比較的高く、「はかり」は30代が有意に少ない。一方「温度計」は50代が有意に多く所持している。い



** P < 0.025

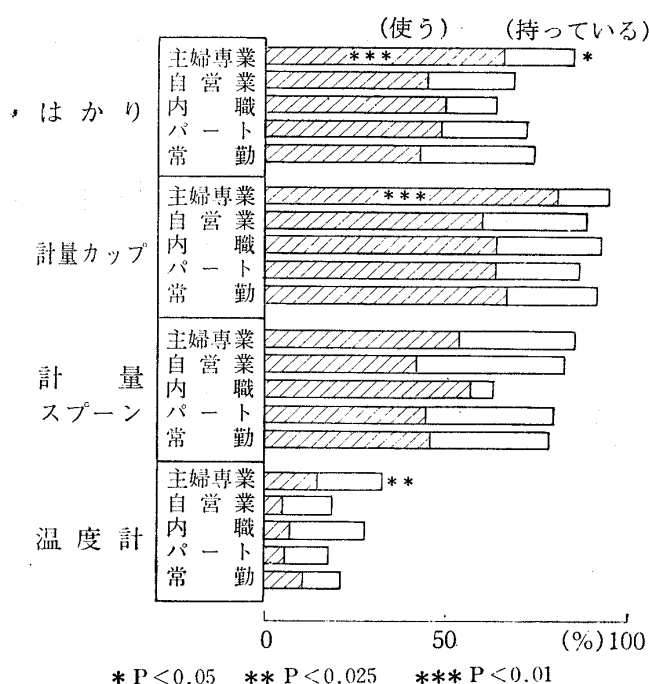
第3図 年齢との相関

注) 棒グラフの欄外の*印は所持, 棒グラフ内の*印は使用についての有意差を示す。

ずれの計量器も使用に関して有意差は認められないが、40代・50代が比較的多く使用している。30代は子育て期に当たるため丁寧・正確に調理をする余裕がないのであろうか。一方50代は予想外に多く所持しかつ使用している。これは戦時中に学校時代を過し調理実習の経験が少ないため、料理の本などを見る機会が多く、その必然性から計量器の使用が多いとも考えられる。しかし今回の調査では30代・50代の実数が少ないから、一概に多く所持しかつ使用しているとか、または使用していないとは言えないであろう。

② 職業

第4図に示すように計量器の所持率は主婦専業に比較的多く、ことに「はかり・温度

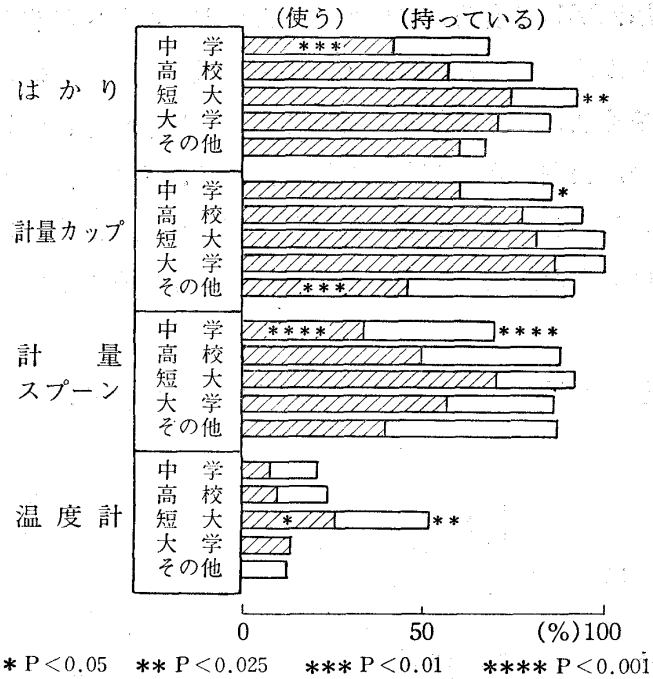


第4図 職業との相関

計」は有意に高い。使用率においても比較的主婦専業が高く、「はかり・カップ」は有意に高い。主婦専業であるから1日の家事労働時間の中で調理に時間を多くかけることができ、また料理に関心も深く計量器を使って丁寧に調理するのであろう。

③ 最終学歴

第5図にみられるように所持率は短大・大学に比較的高く、なかでも「はかり・温度計」は短大が有意に高く、「カップ・スプーン」は中学が有意に低い。使用率は矢張り短大・大学が比較的高く、「温度計」は短大が有意に高い。「はかり・スプーン」の使用率は中学が有意に低く、「カップ」はその他（各種学校など）が有意に低い。短大が所持率・使用率ともに高いのは、年令から推測して昭和37～43年に家政系とくに食物栄養関係学科の短大の増加⁴⁾により、その出身者が多いのであろうか。



第5図 最終学歴との相関

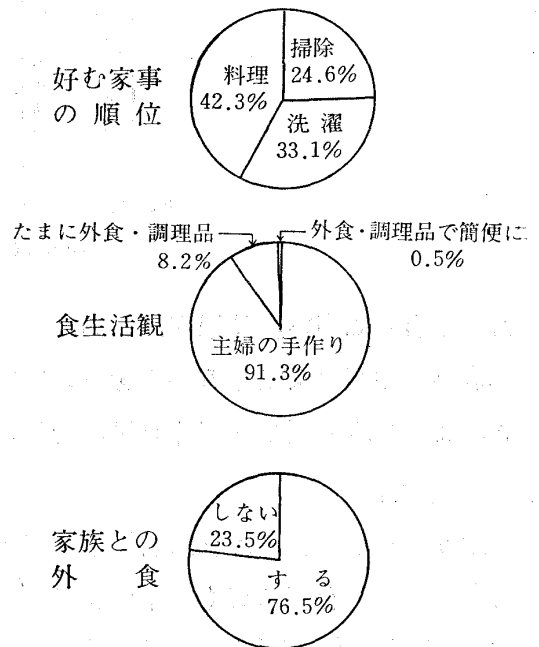
④ 家族構成

第3・4表に示すように、いずれの計量器についても核家族・三世代家族・その他(母子家庭など)の間には所持率・使用率ともに有意差は認められない。したがって家族構成の相違は計量器の所持・使用に影響は無いものと思われる。

2) 被調査者の個人的要因との相関

① 好む家事(掃除・洗濯・料理)の順位

第6図に示すように単純集計の結果は、第1位に好む家事は料理>洗濯>掃除の順である。次いで第7図にみられるように、計量器の所持率については料理・洗濯・掃除間に有意差は無い。しかし使用率については料理が比較的高く、なかでも「はかり・スプーン」は有意に高い。料理を好む者には、計量器を使用して上手に美味しく作りたいたいとの思いがうかがわれる。



第6図 好む家事の順位, 食生活観, 家族との外食 (N.A.を除いた%)

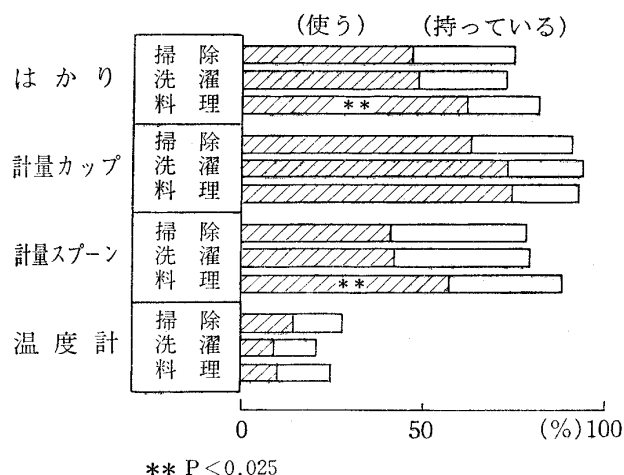
第3表 調査事項6項目と計量器の所持との相関

項目	計量器の種類			計量カップ			計量スプーン			温度		計
	あ (人)	な (人)	い (人)	あ (人)	な (人)	い (人)	あ (人)	な (人)	い (人)	あ (人)	な (人)	
家族構成	核家族 (80.3)	244	74	292	26	263	55	83	285	13	57	2,744 n.s.
	三世代家族 (17.7)	55	14	65	5	59	11	0	3	0	0	
家庭で作る食事	朝風夕すべて (84.6)	260	75	307	23	278	57	85	250	12	41	2,833 n.s.
	朝夕のみ (13.4)	37	16	48	5	40	13	0	8	0	0	
1日 の 総調理時間	その他 (2.0)	7	1	8	0	7	1	0	0	0	0	5,518 n.s.
	2時間以内 (30.1)	95	24	109	10	96	23	26	93	25	51	
	3時間以内 (47.7)	143	46	173	16	155	33	43	146	25	51	
	4時間以内 (19.2)	57	19	69	7	63	13	3	5	3	5	
家族 との 食事のとり方	その他 (2.1)	5	3	8	0	8	0	3	5	3	7	11,172 n.s.
	朝夕のみ全員 (17.7)	55	15	66	4	61	9	26	44	28	104	
	夕のみ全員 (38.6)	120	33	139	14	124	29	35	118	5	25	
	朝のみ全員 (7.6)	21	9	27	3	26	4	5	25	28	104	
	いつもまぢまぢ (33.3)	97	35	120	12	105	27	5	25	28	104	
調理 品の 使用	その他 (2.6)	10	0	10	0	9	1	3	7	3	7	3,653 n.s.
	使わない (19.2)	63	16	69	7	64	12	25	51	25	51	
食事 の 材料 利用	利用する (7.1)	20	8	26	2	24	4	7	21	7	21	0,005 n.s.
	利用しない (90.4)	277	81	327	31	292	66	88	270	88	270	

項目欄の () 内の数字は単純集計による%である。N.A.を含めると100%となる。 χ^2 検定はN.A.を除いて行なった。

第4表 調査事項6項目と計量器の使用との相関

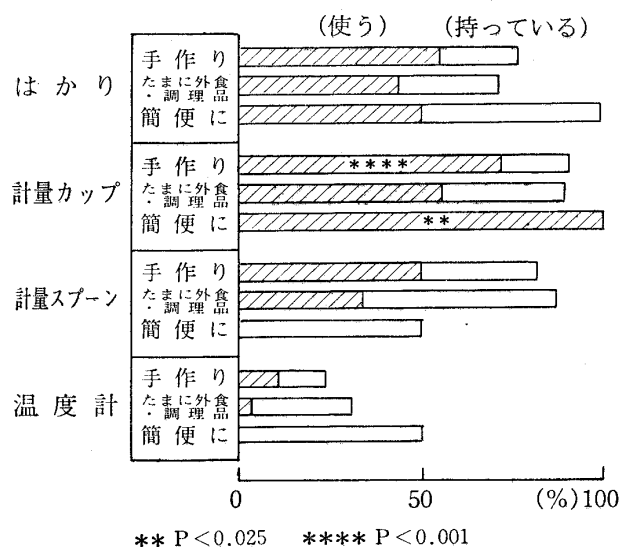
項目	計量器の種類 (%)			計量カップ			計量スプーン			温度計		
	使 (人)	使 わ な い (人)	χ^2 判 定	使 (人)	使 わ な い (人)	χ^2 判 定	使 (人)	使 わ な い (人)	χ^2 判 定	使 (人)	使 わ な い (人)	計 χ^2 判 定
家族構成	核家族 (80.3)	170	148	223	95	2.716 n.s.	157	161	2.963 n.s.	36	282	2.341 n.s.
	三世代家族 (17.7)	41	29	52	18		34	36		4	66	
	その他 (0.8)	0	3	1	2	0	3	0	3			
家庭で作る食事	朝昼夕食すべて (84.6)	181	154	240	95	6.231 n.s.	162	173	5.042 n.s.	33	302	1.485 n.s.
	朝夕のみ (13.4)	29	24	37	16		28	25		7	46	
	その他 (2.0)	3	5	3	5	1	7	0	8			
1日 の 総調理時間	2時間以内 (30.1)	61	53	77	42	8.741 n.s.	53	66	4.936 n.s.	10	109	3.474 n.s.
	3時間以内 (47.7)	106	83	140	49		89	100		18	171	
	4時間以内 (19.2)	40	36	56	20		44	32		11	65	
	その他 (2.1)	4	4	5	3		4	4		1	7	
家族 との 食事 の とり 方	朝夕のみ全員 (17.7)	36	34	54	16	11.736 n.s.	39	31	8.273 n.s.	10	60	6.756 n.s.
	夕のみ全員 (38.6)	83	70	109	44		73	80		14	139	
	朝のみ全員 (7.6)	17	13	23	7		18	12		0	30	
	いつもまぢまぢ (33.3)	72	60	88	44		57	75		15	117	
	その他 (2.6)	5	5	6	4		4	6		1	9	
調理 済 の 使 用	使 う (80.1)	176	141	228	89	1.137 n.s.	151	166	0.334 n.s.	30	287	0.395 n.s.
	使 わ な い (19.2)	36	40	50	26		39	37		9	67	
食 事 の 材 料 利 用	利 用 す る (7.1)	14	14	23	5	2.382 n.s.	18	10	3.134 n.s.	4	24	0.540 n.s.
	利 用 し な い (90.4)	192	166	251	107		168	190		36	322	



第7図 好む家事の順位との相関

② 家庭調理における食生活観

食生活観に関して、アンケートでは「家族に手作りの料理を食べさせる」「たまには外食や調理済み食品を使う」「外食や調理済み食品で簡便に行う」の3項目の他に「その他」欄を設けた。しかし「その他」欄の記入が無かったので、前記3項目で単純集計を行なった。その結果は第6図に示すように、「主婦の手作り」が圧倒的に多く、「たまに外食・調理品」は約8%、「外食・調理品で簡便に」と答えた者はわずか0.5%（2名）である。次いで計量器の所持率・使用率との相関は第8図に示すように、所持率について「手作



第8図 家庭調理における食生活観との相関

り」「たまに外食」「簡便に」の三者間に有意差はない。使用率について「カップ」は「簡便に」が有意に高い結果になったが、この項目の該当者は2名であるから、あらためて「手作り」と「たまに外食」の2項目について χ^2 検定を行った結果、「手作り」が危険率

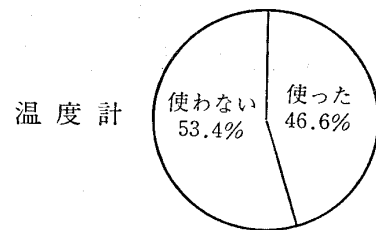
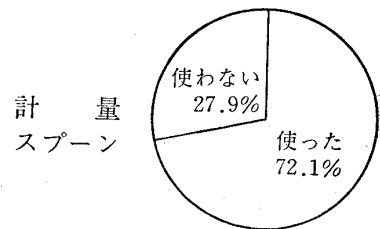
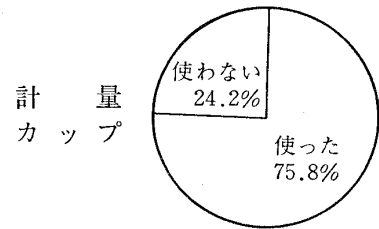
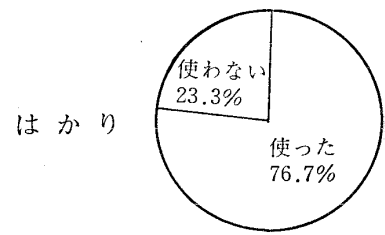
0.1%で有意に高くなった。家族に手作りの料理を食べさせたいとの食生活観を持っている主婦は、調理への関心の高さが予想され、いずれの計量器においても使用率が比較的高いのは当然の結果であろう。

③ 学校時代に計量器使用経験の有無

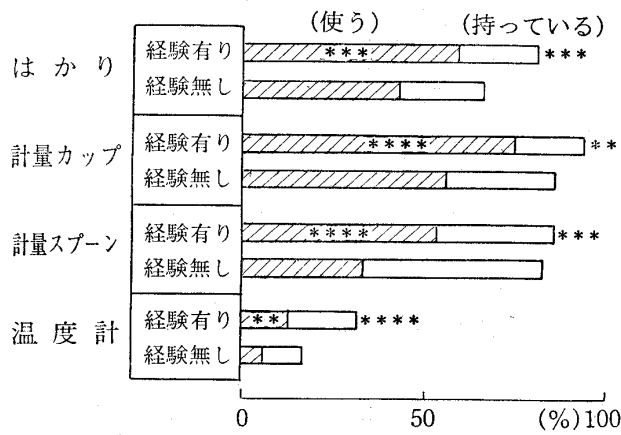
単純集計において第9図に示すように、学校時代の使用経験は「はかり・カップ・スプーン」は約72~77%の高率であり、「温度計」は約47%でやや低い。第10図にみられるように、いずれの計量器についても所持率・使用率ともに学校時代に使用経験の有る者は無い者よりも有意に多く所持し、また多く使用している。しかも「はかり・カップ・スプーン」においては、危険率1%または0.1%の有意差である。中学校・高校の「家庭科」または家政系の短大・大学において、調理用計量器を使って実習するその教育効果があらわれたものとみてよいであろう。

3) 家庭における食生活形態との相関

- ① 家庭で作る食事（家庭において朝・昼・夕のうち、どの食事を作るか）
- ② 1日の総調理時間
- ③ 家族との食事のとり方（一緒に食事をするか）



第9図 各計量器の学校時代における使用経験の有無 (N. A. を除いた%)



** P<0.025 *** P<0.01 **** P<0.001

第10図 学校時代に計量器使用経験の有無との相関

否か)

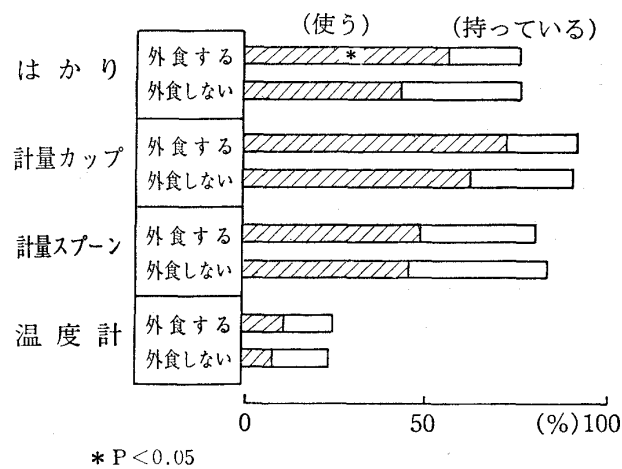
④ 調理済み食品の使用

⑤ 「食事材料宅配」の利用

①～⑤の項目との相関は、第3・4表に示すように4種類の計量器ともに所持率・使用率のいずれにも有意差は認められない。すなわち、これらの要素は計量器の所持と使用にほとんど影響を与えていないことが解る。

⑥ 家族との外食

第6図に示した単純集計の結果、家族と外食をする者は比較的多く約77%である。第11図に示すように、家族と外食をする者としらない者との間にはいずれの計量器においても所



第11図 外食との相関

持率はほとんど同じで有意差はない。しかし使用率は外食をする者がやや高く、「ばかり」においては有意に高い。外食の経験から家庭の味以外の専門家の味に興味を持ち、模倣して少しでも美味しく作りたいとの意欲が計量器使用の高さにあらわれているとも考えられる。

以上の結果から、家庭における主婦の調理用計量器の所持と使用の実態に影響を与えている要因は、家庭における食生活形態よりも、職業・最終学歴などの主婦の属性、ならびに家庭調理における食生活観・好む家事のような主婦の個人的要因がより大きい影響を与え、とくに学校時代に調理用計量器を使用した経験を持っていることは大きな要因となっていることが推定される。

要 約

学校の調理実習で学習した計量器を、家庭の主婦がどのように活用しているか、計量器の所持と使用の実態およびその実態の背景にある要因について、アンケート調査を行ない検討した。計量器は「はかり・計量カップ・計量スプーン・温度計」の4種類とし、名古屋市内に居住する主婦を対象として調査した。結果を要約すると次のようである。

1. 計量器の所持率は「はかり・カップ・スプーン」が比較的高く、使用率はいずれの計量器においても所持率よりも低い。
2. 職業別にみると、いずれの計量器においても所持率・使用率ともに主婦専業が比較的高い。
3. 最終学歴別では、4種類の計量器において所持率・使用率ともに短大が比較的高く、中学が比較的低い。
4. 好む家事の順位別では、料理を第1位とした者に「はかり・スプーン」の使用率が高い。
5. 家庭調理における食生活観では、手作りの食事を家族に食べさせたいと言う者の使用率がいずれの計量器においても比較的高い。
6. 学校時代に計量器の使用経験の有る者は、無い者よりも4種類の計量器の所持率・使用率ともに極めて高い。
7. 家族と外食する者は、しない者よりもいずれの計量器においても使用率は比較的高い。
8. 家族構成および1日の総調理時間などの家庭における食生活形態においては、4種類の計量器の所持率・使用率ともに有意差は認められない。

本報の要旨は、昭和59年5月12日の第30回日本家政学会中部支部総会において報告したものである。

おわりに、アンケート調査に御協力いただきましたA高校の吉水教頭先生はじめ諸先生、ならびにB高校の小木曾綾子先生に深甚の謝意を表します。また調査方法および有意差検定につきまして御教示いただきました本学の石川辰彦先生、寺尾文範先生に厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 仙波千代：新版家庭科教育法，光生館，東京，17（1981）
- 2) 安藤昭代：家庭科教育，59，8号，42（1985）
- 3) 山内光哉監訳：質的データの解析，新曜社，東京，125（1980）
- 4) 沢野勉，松岡明子：家政誌，23，80（1972）